

6-3 ライブ版CDを作成する

Steinberg WaveLab Studio

■ 通常のCDとライブ版CDの違い

普通にCDを作成すると曲間に無音の空白が入る。ライブ演奏の場合この空白が気になるので、空白がないようにCDを作りたい人もいるだろう。

この無音区間のことをCDの構造用語で「プリギャップ」と呼んでいる。多くのパソコン用のCDライティングソフトでは、曲間に2秒間のプリギャップが自動的に挿入されるため、ライブ版作成には不向きなのだ。

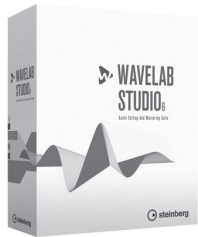
プリギャップを0にすれば、理論上は曲間がなくなりスムーズに繋がるはずだ。CDライティングソフトの中にはプリギャップを0にできるものもいくつかある。ただ、ここでも問題が生じる可能性がある。前の曲と後の曲がデータ上完全に繋がっている必要があり、その繋がったまま曲をキレイに切断する処理がなかなか難しいからだ。

CDの構造上、プリギャップは別に2秒に決められているわけではなく、長さは自由に設定できるし、実は無音である必要もない。プリギャップを3分に設定し、その間に拍手や歓声を入れたり、MCを入れるといったことも可能だ。これを利用して曲をスムーズにつなげることもできる。

■ ライブ版CDが作成できる特殊なソフト

こうしたライブ版CDが作成できるシステムはというと、業務用のものを除きあまり存在しない。パソコン上でできる市販のソフトはというと、ごくわずかに限られる。Steinbergの「WaveLab」およびその下位バージョンの「WaveLab Studio」、SONY CREATIVE SOFTWAREの「Sound Forge」にバンドルされている「CD Architect」、それにMAGIXの「Samplitude」くらいだ。

ある意味これらも業務用のソフトだが、中でも比較的安価に入手できるのが「WaveLab Studio」だ [6-3-01]。ジャンルのには波形編集ソフトであるが、Sound ForgeやSamplitudeがWindows



[6-3-01] 国内ではYAMAHAが販売しているドイツSteinberg社の波形編集ソフト「WaveLab Studio 6」

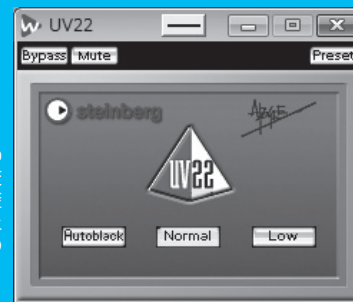
専用なのに対し、WindowsとMacのハイブリッドとなっており、どちらの環境にもインストールできる。

WaveLab Studioの「UV22」で16bit/44.1kHzに変換する

コラム

24bit/96kHzで録音した音を16bit/44.1kHzに変換する際、とくに24bitから16bitへのbit深度コンバートで「量子化歪み」と呼ばれるものが発生して音質が劣化する可能性がある。これを取り除くにはディザという仕組みがあるが、WaveLab Studioにはプロの世界で使われているApogee社の「UV22」という高性能なディザが搭載されている [6-3-02]。せっかくなら利用するといいたいだろう。使い方は単純でマスターエフェクトにこれを加えるだけだ。

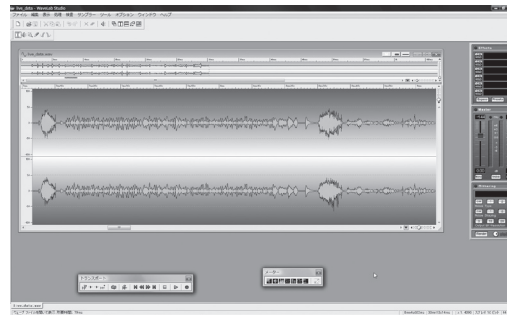
[6-3-02] WaveLab Studio 6には、24bitを16bitに変換する際に発生する量子化歪みを補正しキレイな音に仕上げるシステム、Apogee社のUV22が搭載されている



■ オーディオを読み込み、不要な部分はカットする

では、WaveLabでどのようにプリギャップを設定をするのかを見ていこう。30分のライブであればその30分のデータを分割せず、そのままWaveLab Studioで読み込む。なお、ここでは音としてはすでに整えられた16bit/44.1kHzのWAVファイルとなっている前提で話をしていく。

「ファイル」メニューの「開く」→「オーディオ」でWAVファイルを読み込むと、画面には波形が表示される [6-3-03]。



[6-3-03] オーディオファイルを読み込み、しばらくするとWaveLab Studio上で波形が生成され、表示される